

国家と地球を支える水循環

グローバルウオーター・ジャパン 代表

吉村 和就 よしむら かずなり

司会
矢野 弾

日刊工業新聞社

論説委員

（矢野経済研究所特別顧問
潮流社社長）



吉村 和就 氏

——日刊工業新聞で、山崎さんが取材した、吉村さんの記事を拝見しました。取材に至った経緯は、どのようなものだったのでしょうか。

山崎 三年前に環境省でご縁があり、取材に至りました。平成二十七年の「環境成長エンジン研究会」の委員にお互い選ばれ、たまたま席が隣だったのです。研究会では、報告書



山崎 和雄 氏

を制作して各省に配布しました。実は環境省で会う以前から、荏原製作所を取材した際に、同社にお勤めだった吉村さんを存じ上げておりました。仕事で親しくさせてもらっていました。環境省で偶然再会して、興味深いお話を伺い、何度か記事で取り上げさせていただきました。

——吉村さんは非常に豊富な知識を持たれており、お考えにも光があり、大変貴重なご意見が多くあります。「地球」という概念を持っているからこそ、問題にアプローチできるのでしょうか。

吉村 国連加盟国百九十四か国では、国連で決めた「SDGs（持続可能な開発目標）」をどう構築していくかが、二〇三〇年までのテーマです。十七個の目標があるなかで、水に関わるのは第六目標の「すべての人に水と

衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する」という、たった一項目のみ。水の研究者としては、たった一項目しかないと憤りを感じます。チグリス川やユーフラテス川などの周辺に古代文明が出来上がったことも、すべて水が元になっています。人間の文明は水から始まっているのです。

——水が文明の始まりですね。
吉村 私たちの生命を支え、生活を発展させているのは水であることを、できるだけ多くの方に知ってもらいたいです。

——今、注目している問題点とはなんですか。

吉村 例えば、地球温暖化対策が進んでいる中でも、水を正しく使うことができれば、加度的に進む地球温暖化のスピードも緩むことでしょう。二度の気温上昇がデッドライン



になるため一・五度に抑えることを目標に掲げています。

今世界には、安全な水にアクセスできない人口が八億人、トイレを利用できない人口が二十五億人います。その結果、乳幼児や水関連の伝染病での死者数が増加しています。世界中の人類にとって、非常に深刻な問題です。適切な水循環が生命の安全を支えているのです。こういったことを日本国内だけでなく、国連の場でも発信しています。

——吉村さんが国連でお勤めだったのは何年間ででしょうか。

吉村 住んでいたのは四年間、日本と行き来していたのが一年間ですので、合計五年です。国連本部やユネスコ、UNDP（国連開発計画）などの国連機関で活動していました。

——吉村さんから聞いて、いまだに耳に残っ

——肌感覚で取り組まれたものなのですね。

吉村 世界への視線を養えたかもしれません。現在、水循環を整えた地域は、飢餓を含め、諸問題を解決できます。水さえあれば農業生産ができます。人間の争いは、水から始まっています。

——中国では、水を治める能力がある者は、国を統治する能力があると言われます。

吉村 中国は、その広い国土のために、慢性的な水不足に悩んでいます。豊富な水源は、南方地域にあります。中国の「南水北調」と呼ばれる水政策は、南の豊かな水を北方地域の北京や天津まで送るプロジェクトでした。しかし、集まったのはすべて汚染水。山峡ダムにも汚染水が溜まっています。

山崎 山峡ダムが位置するのは上流だと思えますが、そんな上流でも汚染されているので

ている言葉があります。それは「英語のできない人は、世界人になれない」という言葉です。非常に印象的な言葉でした。

吉村 英語は、百九十四か国それぞれで特徴を持っていきます。たとえば、水という単語一つとっても、イギリス英語では「ウォーター」ですが、アメリカ英語では「ワラー」と発音します。私自身、東南アジアの英語を理解していたことが、国連での活躍につながったと思います。私は小学生の頃、アマチュア無線に熱中していました。自分で真空管を集め、送受信機を作り、実家の松の木にアンテナを張り巡らせ、全世界約二万局の無線局と交信したのです。小学生の頃から東南アジアの英語を聞いていたので、ヒアリング能力がついたのでしょう。その能力が国連で一番役に立ちました。

しょうか。

吉村 はい。周辺にいくつもある重慶などの百万人都市も被害を受けています。

資源の中でも水だけは、何度でも使える「循環資源」です。世界の水の大循環や小循環、各国の水循環を整えれば、食糧難や衛生管理の問題のほとんどを解決することができます。これからのように技術とファイナンスを紐付けられるかが、私に課せられた問題だと感じています。

——世界中、そしてそれぞれの国が取り組むべき問題ですね。

吉村 水を使うということは簡単に言えば、地域にある資源を活用することです。最もエネルギー効率が良く、循環させられます。地域に山があれば、雨が降って、川ができ、都市がつくれます。



水は、健康に役立ちます。持続可能なエネルギーを生み出すのは、すべて水です。たとえば、水力発電やバイオマス発電。日本では、限界集落が増えて人口も減っています。ただ、日本の国土は、山が七割で、豊富なバイオマ

ス資源を持っています。たとえば、群馬県上野村は、九七%が森林。バイオマス資源から発電して、しいたげ工場を稼働しています。そこに水とエネルギーさえあれば、住民はきちっと暮らせるのです。

——吉村さんが水研究に取り組まれたことは、日本や世界にとって財産だと思います。

吉村 「人間を水が支える」ことを皆さんに知ってもらいたいです。人生百年時代では、水とエネルギーさえあれば、どこに住んでもある程度の生活ができます。

山崎 水がエネルギーになるので、水さえあれば、人間は生きていけるのですね。

吉村 その通りです。ただ、水だけでなく食料も必要です。野菜や肉の収穫もすべて水のおかげで実ります。

——山崎さんは、次の世代が日本を背負うた

——その点、日本は条件に恵まれていると思います。砂漠地帯はどうすべきなのでしょうか。

吉村 たとえば、サウジアラビアは、海水の淡水化技術を利用して例がほとんどです。しかし使用後の水はすぐに破棄してしまいません。使用後の下水を、浄化処理して再利用すれば、資源をさらに有効に使えます。水の再利用に取り組んでいるのは、シンガポールです。下水を浄化して飲料水に使っています。そんな重要な浄化を支えているのは実は、日本の技術なんです。日本では、年間一・六mの雨が降るため水が溢れています。日本には、乾季や雨季がありません。しかし、東南アジアには必ず乾季と雨季があります。水は溜めておくとも腐るので、処理をしなければなりません。日本では、江戸時代から水循環を

うまく使っていました。まず飲料水、次に雑用水、そして洗濯用水、最終的に水田に引いていました。

山崎 昔は、砂漠地帯にも水が行き届いていて、木が生えていました。木を伐採して、雨が降らずに水がなくなったのでしょうか。

吉村 そうですね。チグリス、ユーフラテス、イラン、イラクは、緑の多い非常に豊かな土地でした。

山崎 植林すれば、元に戻るのでしょうか？

吉村 はい。

山崎 なぜ植林しないのでしょうか？

吉村 これだけ地球温暖化が進んだ状態では、今から植林しても育つまでの水資源が足りません。今、アマゾンでさえも、伐採のために水不足に陥っています。

山崎 伐採が水とつながるのですね。

めにどうしたらよいと思いますか。

山崎 家庭が重要だと考えています。家庭がしっかりしていないといけません。

——子が親に手をあげる時代ですからね。

山崎 そのためにも学校、とくに小学校が一番重要ですね。中学校から大学受験を見据えて勉強します。小学校では「日本はこう生きて来た」「あなたはどうか生きていくのか」という基本的な部分を固めることが必要です。

——基本的な部分は重要ですね。人口減少が始まり、日本の未来にとって重たい影を落としてるのは事実です。結婚しなければ、新たな子供が生まれません。自分の生きていく時間はありますが、未来に対して今日や明日しかないわけです。

山崎 結婚しない人が増えているのでしょうか。

——そうですね。

吉村 夫婦の収入によって、変な不平等が生まれています。国家の力が失われているのですね。とにかく、「子供は国家を支える、国の宝だ」という考えが必要なんです。

——今後の展望をお聞かせください。

吉村 水に関わる仕事に四十年以上携わってきた経歴を活かしたいです。世界が持続可能な開発を続けるために水を見直し、水をベースにして、環境や文化、人類について語っていききたいです。我々が水を循環資源として繰り返し使い、これから増え続ける人口のために、世界に貢献していくのが私の夢です。

——吉村さんのお話には、必ず世界や地球という概念が必ずあります。水そして人口という観点で、日本や世界を捉えることができました。有難うございました。

——増えています。結婚を「面倒くさい」と感じていようです。

吉村 人口の三割は結婚せず、結婚しても三度離婚しています。「結婚しなくともいい」と考えているのでしょうか。

山崎 「好きな人と一緒に暮らしたい」という感覚を持っていないのでしょうか。自分が良くなるためにも、パートナーがいた方がいいでしょう。

吉村 パートナーがいない方がいいと考えている人がいます。子供は、国家の財産です。だから、誰の子供でも関係なく、子供がいたら国家として育てていくのが本来の姿です。しかし、今は、夫婦の経済的負担など、さまざまな理由で子供を産みません。「子供とは国の財産である」という精神があれば、無償教育にもつながるでしょう。

■よしむら・かずなり■

一九四八年 秋田県秋田市生まれ
一九七二年 荏原インフィル株式会社 入社

(営業、企画、技術開発)
一九九四年 株式会社荏原製作所本社 経営企画部長
一九九八年 国連ニューヨーク本部・経済社会局・環境審議官に就任

二〇〇一年 同時多発テロ後帰国、荏原製作所に復職
二〇〇五年 グローバルウォータ・ジャパン設立 代表取締役 に就任

■やまざき・かずお■

一九四八年 栃木県小山市生まれ
一九七二年 慶應義塾大学経済学部 卒業

日刊工業新聞 入社(北関東支社編集部配属)
二〇〇七年 同 論説委員長
二〇〇八年 同 論説委員